

この人は誰？

竹中康治（教授 経済政策総論）

わが国ほど海外の書物の翻訳が多い国は他にはないのではないかと思います。経済学も他の分野と同様に多くの書物が日本語に翻訳されて来ました。しかし、過去の偉大な経済学者たちの翻訳本がすべて書店で入手できるわけではありません。現在、絶版となって古書店で探すしかない著作も多くあります。

昨年、過去の偉大な経済学者たちが「競争」について具体的にどのように述べていたかを調べたとき、新刊の翻訳書として入手できない本が以外に多いことに気づきました。例えば、ジョン・スチュワート・ミル（1806 - 1873）の『経済学原理』がそうでした。ジョン・スチュワート・ミルは高校の歴史の教科書に載っているほどの大物です。もちろん古書として入手できますし（インターネットで購入できます）、本学部図書館で閲覧できます。

ミルは古典派に分類される最後の経済学者です。ミルが『経済学原理』を発表したのが1848年で、それから現代の経済学の先祖が誕生するまでにおよそ30年のひらきがあります。ミルは現在でも高校の教科書に載るような偉大な経済学者ですが、現代の経済学は彼が研究したような古典派の経済学とは直接的なつながりはありません。したがって、経済学部で勉強するミクロ経済学やマクロ経済学でミルが登場することはありません。

ミルとほとんど同時に生まれ、ほとんど同時期に経済学の代表作を完成させ、ほとんど同じ時期に死んだもう1人の有名な経済学者がいます。この経済学者が誰かということがここでの問題です。以下、この経済学者を「彼」と呼んでおきましょう。

「彼」は1801年にフランスで生まれ、1877年になくなっています。「彼」は経済学者のみならず、数学者で哲学者でもありました。哲学者でもあったということもミルと共通しています。数学者としては理学博士の学位を取得し、その論文のいくつかはポアソン（この人も有名な数学者です）の目にとまり、ポアソンによってさまざまな後援をうけています。

「彼」は経済学者として、経済学に最初に数学を取り入れたことで有名です。経済学への数学の応用についてはその著書『富の論理の数学的原理に関する研究』（原著1838年、中山伊知郎訳、岩波文庫、1936年）の序文で次のように述べています。

「（この本のタイトルは）余がその研究に数学解析の公式及び符号を応用せんとすることを示している。……大いさの間の関係が問題となれる場合に、数学の符号を使用することは極めて自然である。……それは問題の叙述を容易にし、これをいっそう簡潔ならしめ、さらに広き発展への道を開き、また漠然たる討論の邪道に入ることを防ぐことができる」。

しかし「彼」が同じ序文の中で心配したように、数学を使って経済学を展開することの意義は世間には理解されなかったようで、この本は完全に無視され続けました。というのも、この本はワルラス（最も有名な経済学者の1人）によって紹介される（1873年）まで世に知られることはなかったからです。

「彼」とジョン・スチュワート・ミルとはほとんど同じ時代を生き、どちらもに経済学の代表作をほぼ同時期に発表しながらも、経済学への影響力の及ぼし方は全く正反対です。ミルの本はその時代に注目を受けたのに対して、「彼」の本は無視されました。死後もまた対照的です。現代の経済学の中ではミルの経済学は何の影響も残していないのに対して、「彼」の経済学は2つの点で現代の経済学の中に生きています。一つは経済学に数学を使うことの意味です。もう一つは少数の企業の間での競争（例えば、自動車産業やビール産業のような）は「彼」の名前にちなんでつけられています。

「彼」の本は現代の経済学の先祖が誕生する前に書かれたため、需要曲線を導く効用理論こそみあたりませんが、その内容は現代的で、ミクロ経済学の教科書であるかのような錯覚さえ覚えます（訳語は古めかしいですが）。この本の翻訳版もミルの『経済学原理』と同じように新刊書として入手することは出来ません。「彼」とは誰でしょう。答えは本学部図書館やミクロ経済学の教科書の中で探してみましょう。